

## 令和8年度 北海道七飯養護学校 学校経営方針

～「子どもを真ん中に」ワクワクする学校を、私たちの手で～

### 1 はじめに

令和8年度の学校経営方針は、令和7年度のグランドデザインで大切にしてきた「生きる力の育成」や「チームで」といった土台を継承しつつ、さらに一歩踏み出し、「子どもの20年後の幸せ」を見据えた具体的なアウトカム（成果）を目指すものへと進化します。

なぜ、「20年後」なのか。この20年間で、できないことを反復で克服させる「訓練」からテクノロジー等も使いながら児童生徒の得意を引き出し、社会へつなぐ教育へ。安全に過ごすことや身の回りの自立を目標とする教育から、障害者差別解消法等の法整備により、「自分はどう生きたいか」という本人の意思決定を支援する教育へと特別支援教育は大きく変わりました。

20年後はどうか。テクノロジーの進化により、メタバースとリアルの融合をはじめ、AIを含むデバイス（道具）を使いこなすことなどで、卒業後の暮らしが大きく変わっている可能性があります。

私たちの仕事は、できないことを教えることだけではなく、こうした未来を予測し、これまで以上に、児童生徒のやる気を引き出したり、悩みを相談したりする「心のケア」や「コーチング」を行うことを重視する伴走者としての役割が増すと感じています。

令和8年度、私たちの合言葉は、「子どもを真ん中に」です。

今の社会は激変しています。その中で、私たちが向き合う子どもたちが「20年後」にどんな笑顔で過ごしているか。それを保護者や地域の皆さんと「ワンチーム」で描き、形にしていくのが本校の使命です。

今年度の重点は、「子ども真ん中に」ワクワクする学校 ～チームから組織へ～です。単なる仲良しグループではなく、専門性を持って機能する「組織」として、子どもたちの人権と私たちのウェルビーイングを両立させていきたいと思います。

## 2 目指す児童生徒像

私たちが育てるのは、「自分で自分の明日（あした）をデザインできる」子どもたちです。

### (1) 主体的に動く姿

周りに決められるのではなく、統一された分かりやすい環境の中で、「次はこれをしよう」と見通しを持って動ける力を育てます。

### (2) 自分らしく伝える姿

言葉、ICT、写真など、その子に合った道具を使いこなし、「自分で選んだ」という自信を持って意思表示をすることを目指します。

### (3) 社会に居場所がある姿

学校の中だけで完結せず、地域との関わりの中で「自分の得意なことが誰かの笑顔につながる」という実感を積み重ねます。

### 3 具体的な教育の柱：資質・能力と「3つの約束」

この姿を実現するために、私たちは3つの視点でアプローチを統一します。

#### (1) 「分かる・見通せる」から、安心できる（知識・技能）

##### ① 行動マトリクスの活用と視覚支援

児童生徒の声に耳を傾けると、同じ行いなのに「褒めてくれる先生」と「褒めてくれない先生」もいるようです。児童生徒が安心して学べるよう、行動マトリクスを廊下に掲示するなど可視化し、統一した指導を展開します。

同時に児童生徒の障がいの状態や発達段階等に応じて、具体物や写真、ICT等を用いた視覚支援の充実を図り、児童生徒が日課や学習内容を見通せる環境を提供します。

##### ② 「できた感」の積み重ね

児童生徒の自己肯定感を育むことは、言うまでもなく重要なことです。「できないこと」を指摘する指導ではなく、ポジティブに関わることが重要です。スモールステップで課題を設定し、子どもが「できた！」と思える瞬間を意図的に作り、自己肯定感を育みます。

#### (2) 「できる・選べる」から、自信がもてる（思考力・判断力・表現力等）

##### ① 自己決定は「人権」である

令和7年度の学校評価「人権に配慮した指導」の項目で2名の保護者が肯定的な意見を示しませんでした。これを受け、直後の職員会議で学

年ごとに実施した協議では、呼称の仕方やコミュニケーションに関わる改善が語られました。改めて「人権」を尊重するという認識に立ち、「さん付け」の徹底や「どちらにする？」という小さな選択を授業や行事の中で「自分で選ぶ場面」を創出します。

## ② シチズンシップ

令和7年度はリンゴ農園での体験作業や地域食堂との連携、沖縄民謡など、社会と関わる場面を設定したことにより、児童生徒の表情が豊かになるとともにコミュニケーションや社会性が高まるなどの成果がありました。また、七飯中学校との「交流及び共同学習」は共同学習の側面に軸足を置き、大きな成果を生むことができました。こうした貴重な経験には「見学→参加→貢献→主導」というステップがあることを意識しながら、地域の事業所や小学校、中学校、高校との交流など、児童生徒が社会の一員としての喜びを感じることでできる活動を大切にします。今年度は、学校と地域が単につながるだけでなく、「互いに助けを求め合い、感謝し合える関係（互惠的）」を目指します。

## (3) 「認めてくれる・つながる」から、うれしい(学びに向かう力・人間性)

### ① PBS（ポジティブ行動支援）の定着

昨年度の課題（生徒指導の基本的な考え方や具体的な対応方法について共通理解 54.5%）を真摯に受け止め、欠点を探すのではなく、「今、頑張っていること」に光を当て、褒めるポジティブ行動支援（PBS）の文化

を学校全体のスタンダードとして定着させることで、教職員全員が迷わず、自信を持って子どもと向き合える体制を構築します。

## ② 協働的な経験

教師対子どもだけでなく、地域住民や同年代の児童生徒との関わりを重視することで、感謝したり、感謝されたりする経験を積み重ねます。

特に「交流及び共同学習」では、藤城小学校との実践を始めるほか、町教委において実施している「夢プロ」への参画などを通して、七飯高校とも実践を行います。

町内の学校との交流及び共同学習では、令和7年度の中学部の実践から得られた「参加」「共創」「共生」のステップを意識し、子ども同士が認め合い、助け合う互恵的な関係づくりを大切にします。

## 4 私たちの働き方改革：大人の余裕が子どもの笑顔を作る

子どもたちの幸せを願う私たちは、往々にして自分自身を後回しにしがちです。しかし、疲弊した教職員が、子どもたちの変化に敏感に気づき、温かく寄り添うことは困難です。今年度は「子どもを真ん中に」次の改革を実施します。

### (1) 「前例踏襲」からの脱却と「最適化」

コロナ禍を経て、私たちは業務の簡略化や効率化を経験しました。中には「意外とこれで十分だった」というものも多かったはずですが、勇気をもって前例踏

襲から脱却し、今の実態、子どもを真ん中に据えた「最適化」を選択します。  
効率化して好評だったものは、自信を持って継続しましょう。

## (2) 「余白」の創出による心身の健康確保

子どもたちと向き合う「良質な時間」を作ることを目的に、令和8年度は校務分掌を新設しており、業務の平準化を徹底します。また、会議の精選と工夫、ICTの活用、そしてボランティアの力を積極的に借りることで、教職員の負担を軽減するとともに、「余白」の作り方を可視化することで新たな「余白」を生み出していきます。こうした好循環により、教職員の心身の健康を最優先し、定時退勤しやすい「余白」のある職場を目指します。

## (3) 心理的安全性の高いチーム作り

「こんなことを言ったら周りとうまくやれないかも」という不安は、組織の成長を止めます。本音で語り合い、互いの家庭状況やプライベートを尊重し合える、心理的安全性の高い職場を全教職員で作っていきたいと考えています。

## (4) 専門機関との連携による「孤立させない」支援

一人の担任が全てを背負い込む時代ではありません。保護者、福祉関係者、医療など外部専門家とのケース会議をより円滑に行い、個別のニーズに対する目標や手立てを組織で共有する仕組みを強化します。

## (5) 学校経営への「当事者意識」の醸成

学校の課題を「自分事」として捉えること、「自律的共同群（自ら考え、共に動く状態）」に位置する教職員を増やすことを目的に、教職員の経験や興味

に基づいた「プロジェクトチーム」を随時立ち上げ、学校経営への参画機会を設けます。上意下達ではなく、教職員のアイデアで学校が動くワクワク感を感じてほしいと願っています。

## (6) ウェルビーイングの向上

令和7年度に引き続き、学校評価では「同僚・協働性」と「自主・向上性」という尺度を用いながら、定期的に組織の状態を点検していきます。

組織の状況を自分たちで考え、改善し、個人の能力を発揮することに「喜び」を感じられる環境。そんな環境でこそ、子どもたちは最高の笑顔を見せてくれると考えています。

「大人の余裕」を、子どもたちの未来のために。共に、新しい学校の形を作っていきます。

## 5 令和8年度の具体的な目標

特に以下の指標にこだわります。

- **子どもたちの自尊感情** 「自分には良いところがある」「認められている」と感じる子を100%にします。
- **生徒指導の共通理解（重要課題）** 令和7年度54.5%に留まった「共通理解」を大幅に向上させ、組織的な指導体制を構築します。
- **教職員のウェルビーイング** 「自律的共同群」に位置すると感じる教職員を増やし、仕事へのやりがいを最大化します。

## 結びに代えて

令和8年度の学校経営方針は、学校評価や職員会議、学部や分掌部の年度末反省等の機会を通じて得られた教職員お一人お一人の貴重な御意見を反映し、作成することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

「子どもを真ん中に」一人で抱え込まず、チームで、そして組織で、ワクワクする学校を創っていきましょう。

令和8年4月1日

北海道七飯養護学校長 山内 功